プロレタリア通信

第24号
1991年10月20日
定価 100円

連絡先
〒170-91
東京都豊島郵便局
私書箱59号

振替 東京 0-191397
アジア政治経済研究所

発行『プロレタリア通信』編集委員会

☆万国の労働者団結せよ！被抑圧民族の解放
☆帝国主義打倒・プロレタリア独裁・社会主義
☆スターリン主義打倒・国際非合法党の建設

日本帝国主義を打倒せよ！

「国際貢献」の掛声のもとペルシャ湾に自衛隊の海外派兵を強行した日本帝国主義は今度は「人的貢献」を声高に叫び国連のPKO（平和維持活動）への自衛隊参加を狙っている。直接的には近々実施されるであろうカンボジア紛争解決の為のPKO活動への自衛隊参加である。

この日本帝国主義のPKOへの参加表明に対し国連事務総長は国連への拠出金の増額を期待してか日本帝国主義の「より多くの国際貢献」に大きな期待をかけているとエールを送っている。湾岸戦争以来、帝国主義の道具としてしか行動しえない国連という組織についてあらためて考えてみなければならない時機にきている。

一方、国内では 湾岸戦争後の地方選挙で大敗を喫っした社会党は田辺新体制の下、従来の非武装中立論から安保・自衛隊支持へと政策を大きく転換しつつある。

以上のような絶好の機会をとらえて日本帝国主義は現在PKO法案の作成作業を急ピッチで進めている。このような時にあたりPKO法案をめぐる諸状況について態度を表明しておきたい。

●国連軍創設の挫折とPKOの登場

PKOは国連の機能の一つであるが創設当初から今のような形式で考えられたのではなかった。当初の目的は五大常任理事国を中心にした軍隊からなる国連軍を創設しようとしたが米・ソの冷戦体制が激化して創ることができなかった。当時、世界的に優位にたっていた米帝は米軍を中軸とする大規模な国連軍を主張し、ソ連は帝国主義軍の力を抑えるため各国一律の小規模な国連軍を主張した。力の低下していた英・仏・中の三国もソ連案に賛成したが米帝の反対によって潰されてしまった。

最初のPKOは一九五六年のスエズ危機のとき安保理が機能しなかったときカナダ外相が発案しハマーショルド事務総長が国連総会に提案して中立非同盟諸国によって即時創られた国連緊急軍であった。このときの成功が基になり後年PKOとして認知され現在に至っている。

今度日本帝国主義はカンボジア紛争を契機としてPKOに参加しようとしているがこれまでの中立非同盟諸国によって担われてきたPKOの参加資格からして当然拒否されなければいけない。PKOはその性格からして中立でなければならない。日米安保条約を結んでソ連に対抗し、その経済力を使ってアジア各国を支配しようとして（軍事大国化はすぐにもできる）、自衛隊を世界のどこへでも派兵しようと画策している日本帝国主義にはPKOへの参加資格はない。

●国連は平和の守護神ではない

今度の湾岸戦争は少なくても国連の「武力行使の容認」決議の下に行われた戦争であった。国連憲章の規定では五大常任理事国が決定的な権限を持ち、五大国の中で少しでも意見が異なればいかなる決定もその拒否権によって潰され、その反対に意見が一致すればいかなる破壊行為も世界平和の名のもとに正当化されるのである。湾岸戦争はそのことを我々に如実に教えてくれたのである。このような帝国主義的な「力による平和」が世界をおおっているとき我々人民にはいかなる抵抗の手段があるであろうか。

●世界の、アジアの人民との連帯活動の強化・発展以外には今日の帝国主義的平和に抵抗する手段はない

戦後、反戦平和勢力の一大結集軸であった社会党は年月を重ねるにしたがってますます官僚化して人民から遊離してその支持を失い、闘う人民を切り捨てて中身のない非武装中立論を掲げてきたがその神通力も地に落ち、再建不可能な状態にある。右派の田辺新体制のもと安保・自衛隊支持に大転換しようとしているが戦前の大政翼賛会の道そのものであり人民に支持されることはない。

我々は今こそ自前の政治勢力を形成しその周りに広範な人民を結集していかなければならない。国内の人民を結集するばかりでなく国際交流を活発化して各国人民との意志疎通をしっかりと行って行かなければならない。これがしっかり行われて行かないと強固な国際連帯を作り上げることはできない。

現実には国際交流はかってなく活発に行われている。我々の知らないところで、知らない人々の手によって様々な形で行われている。しかし相互の交流はどうであろうか。成果が広範な人民のものになっているであろうか。こういう多くの人民の活動を組織していく能力がいま我々に問われている。

スローガン

一、自衛隊の海外派兵阻止
一、天皇訪ANAN阻止
一、PKO粉砕
一、日本帝国主義を打倒せよ！

イスクラ

マルクス主義・共産主義は、血を流してたたかっている地域・民族解放闘争を除いては妖怪ではなくなった。

一九八九年ソ連邦・東欧の激変と今次ソ連邦共産党の解体がいわゆる知識人・文化人の退廃をもたらしてきたわけではない。一九五六年のハンガリ動乱にひきつづくキューバ革命と韓国における学生蜂起は新鮮な響きをもって全世界の知識人・プチブル層に迎えられた。既成のマルクス主義・科学的社会主義論を圧倒的物質力をもって専有してきた国際共産主義運動スターリン主義に対して、身命を賭して抵抗し異なる路を示したものこそキューバ革命であり韓国学生運動であった。そこにわが帝国主義足下における学生運動の転換と新党・ブントの結成を見てとることができる。文字通り、この時代、あらゆるものが創造性に満ていたのである。

武装闘争の敗北と全共闘の解体、ベトナム革命の勝利と中国文革の終戦後の国際階級争は、自らたたかいの現場を創出し得ぬプチブル層を生み出した。そこには武装斗争の敗北・党の解体と言う重い事実を抜には語れない。とは言え、知識人・プチブル層の迎合主義を見てとらなければならない。あらゆるものの創造性が枯渇した時代と言わねばならない。

だがしかし、われわれは、状況論者となることを拒否しあくまでも主義者として実践的にいま現にたたかわれている課題を現実的に解決してゆくのでなければならない。

三里塚

二期用地内農地民を防衛せよ

今日、政府・運輸省は成田空港の貨物取扱い量が世界第一位であること、こうしたことをふまえ、「国際国家にふさわしい空港を！」、あるいは「殺人的なラッシュの解消を！」というキャンペーンの下、先の「いかなる状況の下でも強制的な手段はもちいない」という言明とは裏腹に、二期用地収用にむけた攻撃を様々な形でかけてきている。

この成田の貨物取扱い量が示す事態は今日における日本帝国主義の世界における位置を示すものとしてもあり、このことは確実に国民の意識構造を変えつつあるといってもよいだろう。海外旅行、海外出張という形での侵略が常態化するとともに、また日帝が世界の冠たる帝国主義として世界の被抑圧人民によって認識されるにしたがって、自己防衛意識という形で帝国主義的膨張主義は不断に帝国本国内国民各層の中へ浸透を深めている。

こうした現実をふまえ、日本資本による侵略が海外、とりわけアジアの諸国にいかなる影響を及ぼし、また、日本国内における国民生活や政治経済にたいして結びついているのか、そうしたことを改めて考える機会を「アジアと三里塚から生活と環境破壊の”開発”を撃つ6・4東京集会」は提起したといってよいだろう。

豊島区民センターにおいて六時から開催された同集会は二〇〇名にのぼる労働者・市民・学生の結集のもと「奪われたエビ」（PARC）のスライド上映によって幕をあげた。最初の発言者はタイで環境問題と取り組んでおられるデート・ブムカチャー氏で日本資本による土地買い占めがためにタイの土地価格が以上に上昇している事態、また、この買い占めにさらされている土地のうち六対四の割合で森林と農地の比率になっていること、しかもタイにおける森林の役割というものが日本とはまるでちがい、食物をも含めてあらゆる生活資源の宝庫であり、これが破壊されゴルフ場に変わるということが直接的に住民の生活を脅かすものであることを訴えられた。

ついで講演にたった村井吉敬（上智大教授）はシンガポールのチャンギ空港がかつては捕虜収用所のあった地であること、また、日本によるシンガポール虐殺の中心的地域であったことを明らかにした上で、そうした日本による侵略の歴史の一切を黙殺した上で今日日本人観光客がバッコしている状況を語られた。さらに日本資本によるマングローブの強奪が当地の農漁民の生活環境を直撃していること日本資本によって現地住民を低賃金の下酷使し捕獲されたエビやマグロ等海産物を、日本のODAよって建設された港、道路、空港をとおして日本におくり、それを日本人が「安い安い」と喜んでいる状況と云うのが告発された。

集会はついでマハバルキャンペーン委員会の渡辺氏、そして鎌田慧氏、反対同盟の石井武氏とつづいた。

集会を通して明らかにされたことは成田空港建設のために行使されたブルジョア法すら否定した強権的な公権力の行使が海外における日本資本による侵略と一体のものであるということであった。我々はまさしく侵略反革命前線基地たる成田空港を断固廃港に追い込んで行かねばならないのである。

ともに闘わん！

公開シンポジウムに反対します

反対同盟は先の４月９日拡大幹部会において地域振興協議会の提唱する「公開シンポジウム」参加の是非を討議した。

反対同盟は、一期工事が住民の意向を無視して強行されたこと、二期工事も同様の手法で進められていること、政府が事業認定処分の失効を認めていないこと、警察の過剰警備による人権侵害が日常的に行われている事をあげ、協議会にたいして「協議会は、政府・運輸省にたいして、二期工事の土地問題を解決するためにいかなる状況のもとにおいても強制的手段をとらないことを確約させる」を眼目とする五つの条件を付した上で、協議会の参加要請を受ける事を決定した。

私たち「三里塚に緑の大地を！労働者・学生・市民の会」はこうした反対同盟の決定が、この間同盟が繰り返してきた「事業認定失効の確認がないかぎりシンポジウムには参加しない」という言明を反故にし、三里塚闘争のこれまでの歴史を否定し兼ねないものとして反対を表明するものであります。

６６年７月の不当な閣議決定に端を発する三里塚闘争は二度にわたる羽田闘争、一週間に渡る佐世保闘争という激動の時代のなかに産み落とされました。６８年２月２６日、三派全学連は「三里塚空港実力粉砕、砂川基地拡張阻止２・２６現地総決起集会」に反対同盟共闘要請のもと結集し、３月１０日に開催された「三里塚空港粉砕総決起集会」には反対同盟、反戦青年委員会、べ平連が結集し公団分室に向けて攻撃を開始しました。それは三里塚闘争を日本帝国主義の政治的軍事的再編との闘いとしてとらえ、農民運動、土地闘争の領域を越えた次元で帝国主義下における先鋭な階級闘争として位置づけられていたからです。

自らの肉体を武器とした反対同盟の果敢な実力闘争はそうした時代の中で全国の労働者・学生・市民の圧倒的共感を獲得していったといえましょう。支援と同盟の絆を作ったものこそ実力闘争を堅持した反対同盟の闘いであったと言えます。

もちろん現地集会ですら、４～５００名という状況の下でかつてこれの数十倍を要した頃のスローガンを強調したところで説得力がないことは明かでありましょう。とはいえ、「行政裁量の範囲内での確約」ということをもってシンポジウムに出席することは、反対同盟のこれまでの闘い方に反するばかりか、自らの将来をも縛り付けるものとなることが明かであると考えます。

現在、反対運動がかかえる状況は、その結集人員が明らかにするように旧日の勢いを示すものではありません。しかしながら、２０数年間の闘いの歴史は反対同盟自身の下に全国各地の住民運動や農民運動とのネットワークを作り上げてきたと考えます。

微生物農法の会に代表される農の有り様は単に政府の土地強奪に反対する農民としてだけでなく、政府の農業政策に抗し自立した農の有り様をも内包する物として全国の農民から注目を集めてきたのではないでしょうか。各地の住民運動との連帯が建て前としてでなく本音の世界で、また具体的に顔と顔の見える関係性として成立している世界としては三里塚ほどの場はないのではないでしょうか。

私たちはこのことをもう一度とらえかえす必要があると考えます。反対同盟の下には闘いの中ではぐくまれた強固なネットワークが現実に存在します。今必要なことはこれをより明確な形へ、永続的な形へと再度構築し直す事ではないでしょうか。

私たちは会結成以前より、三里塚闘争に関わってきました。長い部分においては２０年近いメンバーもかかえております。今日、反対同盟をしてこうした結論をなさしめたものが、まさしく私たち自身の闘争の関わり方の不十分さ、未熟さにも根拠を持つものとして考えます。

とりわけても８３年３・８分裂以降、反対同盟によって「闘う農業」として表現され、大地再共有運動として進められた運動にかかわり合いながらも、こうして示された新たな運動の萌芽を、一地価が運動を始めた当初の数百倍に上昇し、農業をやり続けること自体困難な今日の状況に即したものとして一共に闘う中で新たな展望としてつくりかえる努力ができず、結局は反対同盟に依存することでしか運動に関われなかった点を深く反省せねばならないと考えております。

そうした反省の上で、政府・公団の不当な人権弾圧とたたかっている反対同盟農民、用地内農民とともに闘う中、新たな展望を切り開いて行きたいと考えるものです。

１９９１年６月

三里塚に緑の大地を！労働者・学生・市民の会

沖縄世反戦ツアーに参加して

木根輝雄

「東京と沖縄を結ぶ天皇制を考える会」の一員として沖研主催の沖縄世ツアーに参加させて頂いた。以下はそこでの感想である。

道すがら出くわすおびただしい基地のありようとカデナ基地で巨大な輸送機によるタッチ&ゴーで、在日米軍基地の国内比率75%という沖縄における基地の存在を実感させられた我々は、読谷へと向かい知花昌一さんのお話を伺うこととなった。資料館前に置かれている骨壺を前にして祖先を大事にする沖縄の人々ですら、伝来の風俗を遺棄せざるをえないまでにヤマトのリゾート資本の侵略が進んできている状況の説明を受けた。ザキミ・グスクに登った我々は巨大なアンテナ施設「象のオリ」、また、トリイステーションの方向を示されながら復帰当時村の71%を占めていた米軍基地を48%にまで縮小させた村民の闘いの歴史を伺った。国民体育大会少年ソフトボール競技の開会式での闘いにふれた昌一さんは、日本ソフト・ボール協会の広瀬が沖縄県国体事務局に二六日の開会式に日の丸君が代を実施しないならば会場変更をせざるを得ないと通告し、県と読谷村に、日の丸・君が代実施を強引にねじこんだことが発端であったことを語った。そしてチビチリガマの「集団自決」の調査から学んだこと、そして日頃子供らに大人達が述べていることからも、どうしても自分が日の丸を引き下ろし燃やさねばならなかった事を、会場の裏でたおれたポールを見上げながら語ってくれた。トリイステーションでは窓が一つもない軍事施設を前に米国を除くと300名ものグリンベレーが配置されているのは世界でも例がないという事実を知らされたのだった。

次ぐ22日にはチビチリガマに向かい、昨日の昌一さんの話を反芻しながら最も愛する者をそれ故にこそ我が手にかけねばならないという事態を引き起こした天皇制という存在を暗闇の中で確かめあった。都市型戦闘施設のある恩納村ではこの軍事施設の存在を許す事がフィリピンをはじめとした人民の解放闘争を押しつぶしことにつながること、そうした事を許さないためにも米軍の侵入を許さない闘いを展開しているという。また、ヤマトのリゾート資本の進出が雇用機会の創出や村興しという歌い文句とは裏腹に低賃金のパート労働としての村民の使い捨てと、環境破壊としてしか結びついていない現実が語られた。

アイデンティティーとは

かつて私はある交流会で沖縄の男性にヤマトの左翼にはアイデンティティーがない。自らのアイデンティティーがない者が他の人間に信用などされるものか、といわれた事がある。確かにその時は反論する術を失ってしまった。我々ヤマトの人間にとって民族としてのアイデンティテイーなどと言って誇りうるものなど、どお見回しても存在しないのだ。まあ、アイデンティティーなどというとひどく抽象的でなんのことやらさっぱりわからないのだが、その場のやりとりの中での話の範囲と、ごく一般論として言えばは文化とか風俗とかを含めた土着の主体性を言うのだろう。

明治以降日本の歴史は常に侵略の歴史であったし、そうした過程の結果として日本における文化とか、風俗とかいったものには必ず、帝国主義的な侵略主義、膨張主義がどこかのところで含まれている。そういう訳で我々にとって、日本文化とか特有の風俗といったものは常に打倒の対象でしかなかったのだ。だからそうした文化的あるいは風俗的な主体性といったものの中に我々のアイデンティティーなど認めうるはずもない、だから民民革命を否定した新左翼に特徴的なものは文化的側面をスポイルした反帝国主義的政治一元主義ではある。民族的な土着の側面を抽象論の中で否定し、コスモポリタニズム的に国際主義を主張するのが新左翼の真骨頂だったし、そもそも愛国などという言葉がでてくれば反帝国主義ではなくとも亡国の方がよりまし、というレベルの話でしかない自称「国際主義者」にとって、この沖縄の男性の話は十分に衝撃的であった。

だが、そうしたことを思いながらもこの沖縄の男性の言葉にはどこかで抵抗を感じたのも事実だった。自らは100%アイデンティティーを主張する彼の発言に羨望と共に反感を感じたのかもしれないが、私にはどうしても彼の主張にも、どこかで自らに対するごまかしがあるように感じてならなかったのだ。

はたして政治的解放を抜きにしてアイデンティティーなど存在しうるのだろうかという疑問である。沖縄の場合、土着の文化や風俗といったものがヤマトによる侵略に対する防波堤として、あるいは抵抗の象徴として機能してきたのであるのだろう。だからこそ沖縄の人々にとって自ら土着の文化、風俗というのは誇りの象徴であり、拠ってたつべき主体性の拠点ともいえるものであったのだろう。

だが、そうした自らの文化、風土に誇りを持つ人々がなに故にヤマトのリゾート資本による環境破壊を、侵略を阻止しえないのか、はたまた、過去繰り返された振興計画による環境破壊が目の前にありながらもなに故に第三次振興計画に期待するのだろうか？

そうした私の疑問に対して今回の旅行は貴重なヒントを与えてくれた。アイデンティティーなど現にあるがままのものにあるのではなく、闘いのなかでこそ生み出されるものだという事だ。87年沖縄国体に於いて日の丸を引きずり降ろし、燃やした知花昌一さんの行動は、それ以降生まれた子供らに対してはオジイ、オバアによってのちょっと昔の話として語られるであろうし、年月の重なりの中で抵抗の詩として語り伝えられるであろう。それはまた新たな闘争を呼び起こすと共に、あるいは叙事詩として、文学として後代に語り継がれるかもしれない。いわゆる「返還」によって沖縄独自の文化、言語が急速に破壊されていると聞く、しかし闘いは確実にまた沖縄独自の文化をアイデンティティーを創り出しているのだろう。

沖縄の解放

今回の旅行の中で沖縄最後の夜に参加者皆で話し合いがもたれた。その中の話であったが、「バルト三国もけっして経済的に見てソ連から自立できるものではなく、独立後は西側に依存せねばならないと言われている。にもかかわらず、リトアニア、ラトビア、エストニアでは独立の為に闘っている。なぜ、沖縄ではそうならないのか」という質問がなされた。それに対して沖縄の薩摩による侵略からすでに四〇〇年を越える事が対置された。答が意味する事はこの四〇〇年の歴史が自立した民族としての沖縄の人々からそうしたアイデンティティーを奪い取る年月としてあったということであろう。そうであればこそ、まさしく沖縄の解放とは沖縄人自身の課題であるということである。日本企業による環境破壊との闘いは沖縄の人々に自らが望む経済の発展が如何にあるべきかを、というよりは生活のスタイル全般におけるヤマトモデルに対する対案を指し示すことになるのではないだろうか。日米安保体制下の在沖米軍、自衛隊との闘いは、単に軍事設備の存在による危険というレベルから、日本帝国主義・米帝国主義によって抑圧されるアジアの被抑圧諸人民との連帯という質を獲得し、まさしく海邦沖縄の未来における周辺の諸人民との新たな関係性を創出するものとして進みつつある。そうした様々な闘いの総体として「沖縄世」として表現されてきた世界観は具体化され、沖縄の人々の心の中に体得され、民族を形作る思想として形成されるだろう。

ヤマトの解放とは

この旅行へと旅立つ数日前に「琉球弧の住民運動」というパンフを読ませて頂いた。そのなかに平修さんが、かつて琉球人という言葉を使うときはヤマトの側にも沖縄の側にもきつい差別意識がしみついていたこと、それを長い闘いの歴史が「琉球」という言葉を誇りをもって語られる言葉へと変えていったといったニュアンスのことが書いてあったように思う（記憶のみを便りとしているので多少ちがっているかも知れない）。

「ヤマト」という言葉を聞くとき、我々は原罪意識の前につい言葉を失ってしまう。それが過去・原現在と続く侵略の歴史が故であり、常に憎悪と軽蔑をもって沖縄の人々によって発せられて来た言葉だからである。

しかし異文化とのふれあいは自分がどうやっても「ヤマト」でしかないことを否応なしに教えてくれた。我々は、沖縄やアイヌ、様々な人々との不断の緊張関係の中から、いまのところ憎悪され軽蔑されざるをえない「ヤマト」ということばを信頼と友好を意味する言葉へと作り替えて行かねばならないのではないのか。被抑圧人民との連帯とは我々自身の内部で失われた文化的共同性、風土的一体感、こうしたものをも再度構築しなおして行く闘いとしてもあるのではないのか、そんな感慨をもって那覇を後にした。とまれこの旅行は私にとって多くの貴重なヒントを与えてくれた旅であった。この旅行を企画された沖研の方々に心から感謝している。

沖縄―本土をつらぬく反戦反侵略・反天皇闘争の構築を!!

日本の未来・世界の未来を考え反戦反安保闘争を闘っておられる全ての人民の皆さん。一九九〇年十一月の新天皇アキヒトの即位礼が華々しく、かつ戒厳令さながらの重警備体制の中で挙行された事は、まだ記憶に新しい事と思います。

一九八五年に私達は《東京・天皇制を考える会》を組織しました。天皇制の名の下に侵略戦争へ民衆を動員し世界の人々へ甚大な被害を及ぼして来た加害の責任を追及し今の日本から天皇制をなくさなければならないと考えたからです。同じ趣旨を持つ諸団体との共同闘争を追求し闘ってきました。

とりわけ、八七年の沖縄国体を利用して天皇ヒロヒトが機動隊に守られて上陸し、沖縄民衆を苛酷な死に追いやった戦争責任をウヤムヤにすることを許さない趣旨からも沖縄問題との取り組みを最重要課題として小集会・連続学習会などを開き、その成果を『沖縄と天皇制』という小冊子にまとめて世に問いました。そして沖縄国体では天皇ヒロヒトの沖縄上陸阻止闘争を果敢に組織した沖縄の寄せ場労働者に連帯するため三次にわたって沖縄現地へ出掛け、その闘いに参加しました。天皇ヒロヒトは病気のため沖縄上陸は果せなかったもののその後の沖縄での皇民化政策は日増しに強まり、またヤマトでは「自粛」ブームの強制で民衆に天皇制への帰依を強制してきました。そしてヒロヒトの死と大葬があり民衆を強制的に服喪させようとする国家権力へも私たちは闘いを挑みました。その連続の上に新天皇アキヒトの即位礼が九〇年十一月に挙行されました。私たちは日本中を網羅した即位礼粉砕闘争の一翼を担って沖縄から上京してきた《沖縄と本土の寄せ場を結ぶ会》を迎え、在ヤマト沖縄出身者で組織されている《沖縄研究会》と共にひとつの隊列を組んで「沖縄の独立をかちとるぞ！」のシュプレヒコールも高く、代々木公園から芝公園まで堂々のデモ行進を貫徹しました。その後の集約集会・交流会の中で九二年の沖縄「復帰」二十周年に際しては糸満市での全国植樹祭へのアキヒト上陸阻止の闘いを組むと共に沖縄の独立へ向けた旗を高く掲げることを決めました。そして私たちの《東京・天皇制を考える会》は《東京と沖縄を結ぶ天皇制を考える会》と改称し、反ヤマト国家の闘いを組む事を決意しました。

今やアイヌ民族の先住民族としての法的地位の樹立の運動、在日朝鮮・韓国民衆の解放闘争、台湾での独立運動、そして東チモールでの民族解放闘争など西太平洋をめぐっての諸民族、プロレタリアートの解放闘争が拡がっています。それへの連帯の中で沖縄解放闘争を組む私たちがどれだけの力を発揮できるか、ヤマトンチュとして、そしてシャモ（和人）としてその存在が問われています。

来る六月二十三日は「沖縄戦慰霊の日」で沖縄中が「二度と侵略戦争へは加担しない」ことを死者の霊へ誓う日ですが、この機会に私たちも東京から沖縄へ出掛け、在日沖縄人と共に独立の旗を掲げて「反戦反侵略」を誓おうと思いました。

昨年から今年にかけて沖縄では①新たな反戦地主の誕生・一坪地主の拡大②大田革新知事の誕生③米軍用地の「強制使用対象地の公告縦覧」の県知事による代行を三ケ月以上にもわたって大田知事を先頭に沖縄人民の大衆的な支持運動によって拒否してきたこと等大きな勝利を勝ち取ってきました。③については海部内閣の卑劣な策動により一時的に挫折したとはいえ、この一連の闘いは密接に連動しており必ずや新たな勝利を勝ち取れるものと確信しています。ともに頑張りましょう。

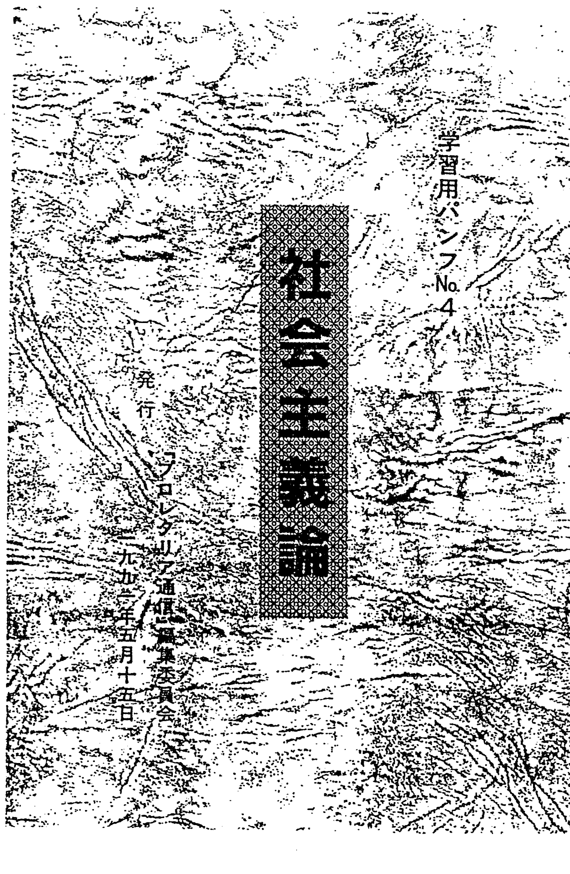
一九九一年六月二十一日

東京と沖縄を結ぶ天皇制を考える会

東京と沖縄を結ぶ反天皇制運動

東京と沖縄を結ぶ天皇制を考える会

発行日　一九九一年六月



沖縄と天皇制

天皇訪沖阻止にむけて

東京・天皇制を考える会

発行日　一九八七年十二月

酒井衛三周忌・『インフケ』出版 記念会催さる

酒井衛氏は一九九八年四月品川の運河で「溺死」として発見された。享年四四才であった。

彼の死には不自然な事が多すぎた。

前の年の夏には新宿駅構内アルプス広場にある警察官詰所内で暴行を受け重傷をおった。その事実を一定新宿警察署は認めつつも加害者名を明らかにしないばかりか当日の勤務者名さい明さなかった。しかも、品川で水死体となって発見されなければならなかった理由は誰れにも理解できない。

彼は大きな夢をもっていた。アイヌ民族解放である。彼は山谷で「アイヌは滅びない」とアイヌ宣言して以来、アイヌ民族解放を労働者階級の解放とともに考えてきた。こうして、彼は結婚してマクベツに帰った後も出稼労働者となって上京するたびに山谷で活動し一方アイヌ解放研究会の設立として活動してきたのである。同時に、共産同赤軍・プロレタリア革命派に属し山谷統一労働組合の副委員長に推挙されもしたのであった。

しかし、彼の晩年は、こうした幾つかの団体に対して一定の距離を置きつつ、自らのアイデンティティを求めつづけていたのも事実である。

大きな夢と現実の狭間でいた。そこに、一九八四年頃よりさかんにフラクションの形成をよびかけることとなった。この狭間とフラクション形成のよびかけは多分に家族への犠牲として重くのしかかったであろう。彼のごく平凡に父親や夫として生きたい欲求と今、現に血を流し差別に苦吟する同朋・ウタリと寄せ場労働者への想いである。ここに彼の一倍やさしい心根がある。

家族を愛しつつもそれに応いきれないふがいなさと、どうにもおさいきれない社会革命への欲求との狭間に彼の苦悩をよみとらなければならない。それが後に残されたわれわれの課題である。

六月一日は、以上の彼の生きざまにふれ、そして『イフンケ』を通じて感じるところを得た人々約八〇名によって遅れた三周忌とともに「追悼・出版記念会」が催されたのである。

斎藤信明氏を追悼実行委員長とし、「イフンケ」出版に執念をもって取り組んだ安藤清史氏を出版委員会の代表者とし、総合司会を加藤輝雄氏のもとに会は進行した。特に、加藤輝雄氏は、七二年当時最も身近に酒井衛氏と論争しこの世界・とりわけ共産同赤軍派へ説得を試みたであろう。そこで、加藤氏は万感こめて司会をつとめたのであった。

北海道テレビ録画「イフンケ」の上映とともに鷲谷サト・フチによるアイヌ民族のおかれている現状への告発と糾断、そして「イフンケ・子守歌」の朗晶は、参加者すべてに深い感明を与えたのである。各界から多くの人々が出席した。そして発言を得たのであるが、しかし、鷲谷サト・フチによる被差別の報告とそれへの糾断は、酒井衛氏へ不明の死を無駄にしてはならないと警告してあまりあるものであった。

『イフンケ』
彩流社　二五〇〇円
イフンケ出版委員会

交流会（清算事業団）傍聴記

去る五月、JR労働運動グループ主催の、北海道より首都圏へ物品販売オルグに来た闘争団員（清算事業団）との交流会を傍聴させてもらった。

国鉄の分割民営から四年、一〇四七名の大量解雇から一年たった今、清算事業団闘争は政府・JRの喉にささったとげのように「国家的不当労働行為」の本質を満天下にさらけ出しつずけている。

とはいえ当該の闘いは今、全国の多くの闘争組織がおかれている状態とおなじく、多くの困難に満ちたものであることも闘争団の報告は示していた。

闘争団は全国三十五あるが、昨年四月解雇後三ヶ月は失業保険、八月以降三分の二はアルバイト（建設現場等）、残りは事務局や物品販売を行い、プールして最低十一万、最高十九万支払っていること、アルバイトも都市部ではまあまあだがはなれると大変で本州まで出稼ぎとなる。

闘いながらの生活をめざして毎週ならびに毎月の重点闘争（JR社前抗議行動）を行っているが、喰うことが中心になってしまうことや、国労の中心課題となっている「出向問題」との間に距離を感じていること、和解がダメで命令をとりに行くなら長期化ー十年はかかるーし、五十二歳の団員も居る今日困難な問題をかかえる。個人としては「団は分割民営の本質を問うもの」で徹底的に闘うつもりだ。

その他物品販売については自治労、教組中心であることや、互助会、全国統一物販、闘争団全国連絡会議の実態などが報告された。

諸々の困難をかかえているとはいえ、依然これだけの大量の闘争団が政府・当局にたいして存在し続けていること・・・このことの重さを報告は意味していた。

他方JR労働運動グループとの討論では活発に

「解雇された者と残った者とのおかれた状況は違うのだから、闘争団独自の闘争組織や発言の場を作らないと中央にふりまわされるのではないか

「三年間で職場では清算事業団問題が風化しつつあるという現状をどうするか

・・・といった意見交換がなされた。

更にベンディング職場での下請労働者とのあつれきの問題が、民同時代の三Kのボー大な下請化と軌を一にしており、今日の出向問題をとうしても下請労働者との連帯問題が問われていること・・等JR労働運動改革の方向等も活発に討論されていった。

周知のごとくJR労働運動は依然流動している。

東中野事故に続く、信楽鉄道事故等安全問題切り捨て、依然三万人体制を維持している国労運動、JR西労結成とJR総連分裂、出向問題、相次ぐ地労委勝利命令等。

そしてその核心の部分に清掃事業団闘争がある。

他方全国労働運動をとって見れば、全局としては右派牽引の流れの中にあっても、地区労存続をめぐる攻防、争議団の継続、ユニオン等労働組合組織化の抬頭、湾岸反戦ー地域との結合等の試みがくりかえされ、広がっている。

それらの中でこのような交流ー現実の対資本・職場の諸問題を見失うことなく、しかし路線問題も論争される恒常的な場はまことに貴重なものである。

このような場の存続・拡大は必ずや将来全国・全地域・全産業の労働運動の左からの再編の一翼を担ってゆくに違いないと確信した次第である。

台灣料理研究會會報第1号

吃　會
1991年8月14日
第1期

發行人朱世紀　編輯人佐藤秋雄
發行所豊島文化社
〒171　東京都豊島区西池袋2−38−6
第一ゴトウビル
電話　03(3987)7155

諸民族の交流について

諸民族の交流について

台湾料理研究会は昨年の五月より毎月末日曜日行われてきた。

台湾料理研究会をはじめる動機は『台湾文化』を主催する張文明氏が留学で滞日して早二十五年になり、その間一度も帰台できないでいる。

台湾は、一九四八年以降外省人・国民党軍事支配がつづいてきた。台湾では、この五〇数年間、民主化を要求する人士、独立を主張する人士の多くが国外追放と獄につながれた。虐殺もまた日常的に行われてきたのである。張文明は台湾における少数民族の権利回復とともに台湾は台湾人自身によってその運命が決定されるべきであること、何よりも台湾における労働者階級をはじめとする農民・少数・先住民族による共和国建設を展望してきた。そうした、張文明氏情熱と現状を知る多くの台湾在日同　が一致協力して料理研究会は始められたのである。そして留学生を中心として在日台湾同　の交流はつづけられることとなった。「FAPA・台湾人公共事務会」留学生新聞『台生報』、留学生団体『出外人』などの新聞や機関紙をもつ団体・人士の協力を得ていることはいうまでもない。

第二に、張文明氏をはじめ、「FAPA」『台生報』『出外人』などを知る良心的な台湾の民主化を独立を支持する、いわゆる日本人グループが台湾の文化の一つである食べ物やその調理、習慣などを学ぶ機会として「台湾料理研究会」に協力してきた。そして、この契機となったのは他でもなく、あの中国における民主化要求運動めぐる連続した学習会である。当時、アジア経済研究所の研究員であった加加美光行氏の講演会、ひきつづいて台湾における民主化斗争の現状などを、台湾人公共事務会日本支部の何昭明氏、『台湾文化』の張文明氏、張文明氏を二〇数年間ささいてきた片山政幸氏の講演をきく機会を得た。こうした学習会をへて、在日台湾人の日常的交流の場として料理会は始められたのである。

台湾を知るとは何か

この一年間に多くの出会いがあった。

アジア太平洋はもとより中近東から南北アメリカから留学生をはじめ民族解放闘争をたたかっている人々、反公害、農民運動の闘士など、何よりも、関東在住の在日の人々、アイヌ民族、琉球・沖縄の人々の参加は、自然とそれぞれの文化の交流となっている。特にことばは、いわゆる日本語を中心となるとは言え、それらはカタコトのことばであり、中国語（台湾では北京語が公用語）であったり英語であったりと多彩である。

食事をし一杯のみながらお互いに構えることなくそれぞれの文化を紹介し合う。ごく自然に台湾の五〇年間におよぶ日本帝国主義による略奪の歴史が話し、そして国民党による二・二八事件が語られる。ときには、「アイヌって何んですか」などというトンデモない質問が出たりする。こうして、日本とは何か、日本人とは一体何なのかが議論されることとなり、「天皇制とは何んなんだ」といった事改めて問えつめると言うよりは、酒の肴として天皇制が無用の長物として話し合われることになるのである。

在日台湾の人たちは、五年ごとの世界同郷会世界大会が日本で行われるというので四月以降大変な忙しさであった。とりわけ、今次世界大会は、台湾における先住・少数民族の権利回復がうたわれることとなっており、さらに「民主憲法」をうたうこととなっていた。そうしたこともあって、料理会はこの数ケ月盛況のうちにすすめられたのである。

台湾は、確実にこの数年の間に大きく様変りするのであろう。たとえ、国民党支配がつづくにしても、これまでどうり治安弾圧優先のみではたちゆかなくであろう。急激な工業化・都市化、それは労働者階級の増大と市民社会化であり、一方での都市と農村の差別化、企業害（いわゆる公害）と核開発は、全く新たな社会的矛盾をすでに露呈しているからである。

本多勝一
京浜運河で変死体となって一生を終えたアイヌの日雇労働者・酒井衛。本書は、日本という虚構の〝先進国〟で民族差別によって殺されていった真の「人間」への鎮魂のうたである。定価2500円(本体2427円) ■彩流社

差別と闘った日雇労働者の足跡
彩流社

……酒井さんが、アイヌ民族の一員としての自覚を持ちつつ、山谷の日雇労働者のたたかいを仲間たちと共にたたかって生きたことの持つ意味を、私たち北海道に暮らし、アイヌ民族との共生をめざすものはじっくり受けとめなければならないでしょう。アイヌ民族の解放のたたかいとこの社会の中でもっとも抑圧されている労働者の解放のたたかいとの本質的なつながりを、身をもって表現した一人の闘い手が酒井衛さんである、という認識において。
（本書、「非命の死が語るもの」）
■花崎皋平

北（酒井）さんへのメッセージ（口絵）……加藤登紀子
はじめに……イフンケの会　1
I　座談会――北さんの足跡　13
第一部　チロットコタンの生活　15
第二部　「どっこい、アイヌは生きている」　27
第三部　北さんの死をめぐって　42
出席者　本多勝一／石川巌／青木悦子／神田東吾／斉藤信明
早稲野／関山孝雄／安藤清史
II　コタンに生まれて――北海道時代　55
III　アイヌは滅びていない――山谷時代　81
IV　カムイワッカ――アイヌ解放研究会時代　145
酒井衛さんとの想い出……萱野 茂　109
酔っ払いだっていいじゃないか！……石川 巌　217
非命の死が語るもの……花崎皋平　220
なぜヤマトの「純血」にこだわるのか……菅 孝行　225
V　やられ続けてたまるか――東京へ・死まで　231
(1)新宿駅交番内暴行事件　240
(3)キタさんの死　248
ザ・アイヌ……榧 英和　292
VII　資料篇　301
アイヌ民族関係史略譜　303
アッケシカムイ・イコトイがこと……佐々木利和　315
北海道旧土人保護法　322
昭和四三年の改正法　324
旧土人児童教育規程　326
アイヌ民族に関する法律（案）　327

4月10日刊
四六判 上製
350ページ写真25枚
定価2500円（本体2427円）

株式会社 彩流社　〒102 東京都千代田区富士見2－2－2　☎03(3234)5931／FAX.03(3234)5932

台湾文化
発行人　張　文　明
編集人　台湾文化編集部
発行所　東京都豊島区
西池袋2-38-8
第一後藤ビル
豊島文化社
電　話　(03)987-7155
台湾民族解放統一戦線
定価1部100円 毎月5日発行

ブント総括の一視角

相模次郎

第一章

第二次ブンド党内闘争から赤軍派結成へ

a、（赤軍派）フラクの結成

六九年の初夏、第二次ブンドは自らが切り開いてきた嵐の中で、嵐に弄ばれるが如く漂っていた。党としての統一性は日に日に揺らぎ、フラクション連合への分解を深めつつ、その中で党の刷新と秋の闘いを模索していた。

後に赤軍派へと至る最初のフラクションも四／二八闘争総括の中から生まれていた。このフラクの最初の出発点は、①四／二八闘争の敗北は革命的昂揚期（一〇／八以来）の敗北であり、このことは革命的昂揚期を革命的情勢へ導く党建設の主体的努力によってのみ突破可能であり、これにふさわしい党を創らなければならない、②フラクはこのような建党の任務をおわされた母体であり、党内党を作り党内党の決定がブンドの決定より優先し、党内党はブントと統一戦線を組むものであり、党内党でブンドを指導していく、というものであった。革命的高揚から革命的情勢への過渡という情勢認識は、全ての階級階層を把える見地、とりわけプロレタリア運動全体を把える見地ではなく、学生青年運動から世の中をみるという狭い、主観主義的なものではあったが、一〇／八以来の運動の転換点と、党の戦闘の転換、すなわち政策阻止ー政治暴露の「革命的敗北主義」的闘いから、党の武装ーブルジョア国家権力打倒ー蜂起に向けて、周到に準備され計画され組織された戦闘への転換、従って党の組織と活動のあり様の転換を直感していた。

他方、「ブンドの上に立つ党内党」という観点には重大な問題がはらんでいた。確かに第二次ブンドの連合的性格は、大闘争の試練と権力の弾圧への直面によって露呈され、その大衆運動主義的な活動様式と共に、もはやそのままではやっていけないこと、〈強固な党〉へ向けての自己刷新と再組織化が必要なことは、あまねく感じられた。そのためにこそ党内闘争は不可避であり、「諸傾向」をより高い次元での結束に向けた求心力へ転化し、総括し、計画としての党建設に向けて自己規制していく「組織問題」としての解決ーその共通基盤の創出ーこのことが党内闘争の目的意識性とならねばならなかった。

だが「ブンドの上に立つ党内党」という観点には、党内闘争を通して闘い取るべきものが、もはやフラクによって獲得されたものとして前提化されており、それ故主観的意図とは別に、統一に対する分離が予め前提され、党内闘争も結果として自フラクを拡大・独自建設して指導権を獲得していくための手段と化さざるを得ない。それはブンドの〈組織に蓄積されている〉全経験の継承（〃連合性の止揚〃をも含めて）を危うくすると同時に、フラクの党的結束の基盤にもかかわるものであった。

b、「前段階武装蜂起」の提起

党内闘争とフラクの位相は、六九年秋の方針論争がフラクによって前面に押し出され、「前段階蜂起」が掲げられるに到って、大きく変化した。この「前段階武装蜂起」は、従来の日本の左翼、従ってブンドにとっても、その常識をこえるものであった。それまで「武装蜂起」についてはロシア革命やドイツ革命を念頭において、レーニンの「マルクス主義と蜂起」やトロツキーの軍事論等で規定されたものを漠然たる共通の常識としていた。というより、帝国主義戦争に至る前に煮詰まる前段階決戦を対権力闘争ー三つ巴戦を通じて主体的に切り拓いていくことは強調されていたとはいえ、蜂起が具体的日程に上る情勢はまだまだ将来のこととして、武装蜂起に関する厳密な論争は全く経験していなかったのである。（事実ほんの数か月前には、ブンド内は革命論方法論ー世界認識の方法論なる観念的論争におおわれていた。）

フラクの、六九年秋前段階武装蜂起の方針は、そういうブンドや新左翼の不意をつき、常識をこえるものとしてあった。それはまず第一に、当面の情勢を「革命的昂揚ーデモよりは著しく大きく革命よりは小さいーから革命情勢への過渡」とし、第二に、六九年秋の佐藤訪米に煮詰まる一大転換点とは、「半蜂起的闘争」の明確な権力闘争への飛躍か、なし崩し的・先行的なファシズムへの権力再編の貫徹かをめぐる、「プロ独かファシズムか」の前段階階級決戦としての煮詰まりであり、第三に、それ故に革命情勢の決着としての武装蜂起ではなく、過渡期を突破する革命的戦術として、そこから革命情勢が始まっていく「世界革命戦争、内戦の突破口である」蜂起として、党による計画的武装蜂起ー首都制圧でもって大衆の安保闘争を権力闘争に領導し、第四に、武装蜂起に一切を集中する党中央直轄の共産主義突撃隊の大規模な建設と、武装蜂起に領導されたソヴィエトの形成、というものであった。この前段階武装蜂起こそレーニン主義を継承ー止揚する、前段階攻撃型世界革命戦略の集中点として強調されたのであった。

ここには、まず第一に情勢の過大評価があった。当時日米関係の歴史的転換点はベトナム戦争・沖縄問題と結びついて鋭い政治的対決点をつくり出し、青年・学生運動は大きく昂揚し激しい闘いを繰り広げていたが、日本資本主義の高度成長・対外膨張を基礎に帝国主義体制が急速に強化され、特に（蜂起が依拠すべき先進的階級たる）労働者の多数は、尚、社共の改良主義・日和見主義の影響下にあり、更にはより帝国主義的・排外主義的潮流が成長し、その勢いを増していた。革命派は、青年・学生運動の昂まりによって漸く一個の社会的勢力として登場し、労働者階級の中に漸くにして革命的中核を築き始めたばかりであり、その大半はサボタージュによって街頭化し、闘争に加わっていたのである。だからブルジョア政府打倒のための、社会主義革命実現のための闘いは、その本格的準備についたのであり、武装闘争を含めて一層周到に準備され、計画され、組織された戦闘を遂行するーー一層強固な戦闘組織をつくり出すという課題は、他方で帝国主義に対する闘いを日和見主義・社会排外主義との闘争と結びつけ、労働者階級の多数をプロ独の側に獲得するための頑強な闘争という課題と不可分のものであり、まさにこの不可分一体において、「主体の転換」を要求するものであった。こういうことが当面の人民闘争の昂揚をおし広げながら、その中で貫かれなければならず、蜂起を準備する計画としての戦術に編み込まれなければならないものであった。

「前段階武装蜂起」は、他ならぬこの「労働者階級を武装蜂起に向けて組織していくための頑強な闘争」とそれに応じる「主体の転換」を、「革命的昂揚から革命的情勢への過渡」という情勢評価と「前段階蜂起」の戦術でとびこえる、もしくは瞬時に解決しようとするものであった。「前段階蜂起」は安保闘争を権力闘争＝内戦へと転換させる戦術であると同時に、この転換を推進すべき「主体の転換」（＝安保闘争を最先頭で闘ってきた主体から権力闘争を闘う主体への転換）をつくり出す戦術としても位置付けられていた。だからそれは「本格的に蜂起を準備するためにはまず蜂起しなければならない」というようなものでもあり、安保闘争の頂点で蜂起することによって、革命的情勢及びそれにみあう主体をつくり出し、蜂起へと組織していけるというものであった。従ってそれは一方では、革命的情勢によって蜂起が日程に上るという従来の見地を、蜂起によって革命的情勢を作り出すへと転倒させ、蜂起によって蜂起のための客観的条件をつくり出すという主観主義をはらんでいた。と同時に他方では、それは汎ゆる形態の闘争によって訓練され、鍛えられたプロレタリアートの前衛によって頑強に、系統的に準備された蜂起というより、他ならぬそのような主体をつくり出すための即席の蜂起として、一旦敗北せざるを得ないことをみこした玉砕主義的蜂起であった。（尚、前段階蜂起は武装闘争一般として取り扱うことはできない。それは武装闘争一

般を批判し、それに対置して強調されたものであった。）

この前段階武装蜂起をフラクが前面に掲げ、党内闘争の焦点に転化することによって、党内闘争は一挙に緊張し、危機の様相を強めた。この方針は「秋に武装闘争は不可避であり、必要である」と考えていたフラクに近い人々、親近感をもっていた人々の中でも、大きな躊躇、ためらい、疑問をよび起こした。しかし、にもかかわらず、正面切った、真っ向からの真剣な批判は展開されなかった。というより、できなかったのである。というのは、それに対する本当の批判は、革命の見地からする秋の武装闘争の獲得目標も含めて、プロレタリア革命のために今真剣に準備すべきことは何か、に正面から答えることであり、どのような主体の転換をいかにして闘い取るべきかに明瞭に答えることであり、そのことはプロレタリア共産主義革命に関わる根本的イデオロギー問題から〈戦術〉に関する真にマルクス的レーニン的観点、党組織と党活動のあり様の根本的変革etc.マルクス・レーニン主義全般に関わって実践的に提出するという、困難で広く深い問題をはらんでいたからであり、第二次ブンドの自己止揚と結びついていたからである。

第二次ブンドは、常に大衆闘争における徹底した左翼主義・急進主義によって局面を切り開き、闘いを領導し、組織的飛躍をも実現してきた。そこには時として、主観主義や観念的見地と結びつき、ないまぜになっていたが、それが大衆闘争の領導に結びついていた限り、又ブンドとしての組織的団結・組織的闘争という枠内にあった限り、それは健康なものであり、第二次ブンドの誇りでもあった。赤軍派フラクの「前段階武装蜂起」は、この第二次ブンドの左翼主義・急進主義を土台としつつ、それを飛躍＝質的転化するものであった。（そのことは「ブンドの上に立つ党内党」と結びつくことによって一層明瞭となった。）言うまでもなく、第二次ブンドの左翼主義・急進主義は否定されるべきものではなく、継承されるべきものであった。しかし、そのままではやっていけないこともまた明白であり、主体の転換――この左翼主義・急進主義の革命的止揚が要求されていた。赤軍派フラクの「六九年秋前段階蜂起」の方針は、この第二次ブンドの左翼主義・急進主義を継承すべき面でも克服すべき面でも極限的仕方で示していた。多くの人々は、それ故にこそ、それに親近感と同時に疑問と危機とを感じ、対処の仕方をためらっていたのである。その意味では、それは革命的に克服されねばならなかった。だが事態はそのための十分な余裕を与えなかった。

こうして「前段階武装蜂起」の方針と「ブンドの上に立つ党」とが結びつくことによって、フラクは〈赤軍派〉としての分派的性格を浮きぼりにし、独自の組織系統の建設に邁進した。他方、それと対抗的に中大グループ等も対抗フラクとして独自の組織的打ち固めを推進し、その中間の諸グループも必然的にフラク化を迫られ、ブンドの党内闘争は一挙に組織的緊張・危機へと煮詰まった。

c、七／六事件と赤軍派結成

第二次ブンドの分裂への決定的転回点となったものこそ七／六事件であった。この時期、ブンドは組織的緊張と危機の只中にあった。統一した指導体制は崩壊しており、各フラクは各々武装して対峙していた。この中では赤軍派フラクが独自の綱領的視点・政治組織路線・組織体系を明瞭にしていたが故に、赤軍派フラクが従来のブンドの解体・再編を推進し、それに対して他フラクが防衛的に対抗するという関係にあった。だが問題となっていたのは、従来のブンドの解体でもなければ、その温存でもなく、従って赤軍派フラクによる他フラク打倒―赤軍派フラクによる指導権掌握でもなければ、反赤軍派的自己防衛―赤軍派解体によるブンド防衛でもなく、現状の危機をどのような政治的・組織的基準の下に、どのような闘争方法をもって再編していくかであった。

とりわけ、第二次ブンドが従来通りではやっていけないことは四／二八以降全く明白であったし、その「左翼主義」的突破をおしはからんとしている赤軍派の「左翼主義」「急進主義」（それは第二次ブンドが持っていた健康な左翼主義・急進主義の極限化＝質的転化形態であった）が逆に危機を促進しているが故に、赤軍派的「左翼主義」「急進主義」を革命的に止揚する観点・基準を要求するものであった。そしてそれこそは第二次ブンド自身の自己止揚・自己変革をめぐる命がけの闘いであり、もはや待った無しで問われていることであった。だがその糸口が見いだせないまま「二つのプロ通」と赤軍派の相互対抗的に――赤軍派フラクの解体・政治局防衛か、政治局の辞任・指導権の奪取か――党内闘争を袋小路へと導きつつあった。党内闘争は、諸フラクの存在を認めた上で、新たに統合すべき政治・組織基準及びイデオロギー的基礎の獲得とその組織形式をつくり出す、全国的・全党的党内闘争の展開へと向かうべき、一つの転回点にさしかかっていた。

七月六日の「全都細胞代表者会議」は、このような党内闘争の新たな出発点としての位置と、各フラクの武装対峙―他フラク解体抗争の公然化という、両方の性格を渾然一体とはらんだまま、一つの焦点に浮上した。そして、七／六は、「赤軍派フラク除名・解体策動粉砕」を叫ぶ赤軍派の“先手必勝”の「防衛的先制攻撃」によって、一挙にフラク間の武装対峙・抗争の修羅場に転化し、それは御茶ノ水で待ち伏せた中大フラクを含めて、ブンド全体を巻き込んだその代償は権力介入によってブンド議長を奪われるという破防法攻撃への敗北の刻印であった。とくに赤軍派フラクは、自らの先制武装攻撃によって七／六の性格を決定づけ、よってもってリンチ―議長の逮捕―破防法攻撃への敗北の直接・最大の責任者となり、と同時にフラクの最高責任者を中大フラクに奪われ、二重の組織的敗北を喫したのであった。

七／六事件は第二次ブンドの運命を変え、赤軍派フラクはその事態の重大さと二重の組織的敗北に苦しみつつ、自己の進路を模索した。フラクは七／六によって解体したのではなかった。フラクに結集していた部分の大半は新たな拠点に再結集し、組織体制を再構築し、自己を維持・防衛した。そして、二重の組織的敗北をどのような仕方で克服すべきかについて模索し続けた。それは、一方での七／六をめぐる自己批判をどのように貫き、自己の責任を全うすべきかという問題と、他方での（赤軍派の存立意義としての）秋の前段階蜂起をいかに貫徹するのかという問題との間を揺れ動き、引き裂かれる模索であった。一方の極には“自己批判―赤軍派フラク解散”論があり、他方の極には“七／六の合理化―別党分派による前段階蜂起”論があった。そして、中大から脱出してきた指導部も加えた討論の末に、きっぱりと、真剣に、誠実に自己批判すると同時に、フラクを固め、秋の蜂起に向けて隊伍を整えるということでまとまった。だからこの自己批判は何よりも、軍事―武装に着手した段階での党建設に対する意識性と党内闘争の自己規律をフラク内に徹底化することにその眼目があり、あわせてブンドの党内闘争をこれ以上悪化させない、分派闘争への流れをくいとめ、党内闘争として再構築することを狙いとし、連合諸派にボールを投げ返したものであった。

自己批判への回答は、フラクの解体と統制委員会への服従であった。そしてそういう上で、9回大会が準備された。フラクは解体を拒否し、従ってそういう状態での9回大会への「参加」は7／6の再現が必至として拒否し、しかし、党内闘争の未だ不十分な段階で別党への道はとらず、あくまで分派闘争として継続しながら分派の止揚―ブンドの組織的統一を目指すということで、分派としての道を歩むこととなった。こうして8月下旬「共産主義者同盟赤軍派結成総会」が開催され、その後に続く“赤軍派”がここに登場したのである。

ただし、ここにはいくつかの重要な欠落があった。その一つは、破防法体制との闘い――非合法組織・非合法活動の系統をどうつくり上げていくのか、それへの習熟、訓練を組織的にどう推進していくかについての無自覚であり、もう一つは、秋の前段階蜂起の政治的位置付け―革命論的深化は追求されたとはいえ、その軍事的考察―軍事的面からみた性格・位置・計画と準備は全く放置されたままで、その意味では前段階蜂起の政治性は技術―軍事的な客観性に裏付けられないまま、ますます観念的に肥大化されたと言える。

第二章

二、大阪戦争・東京戦争、大菩薩

、大阪戦争・東京戦争

8月末に結成された赤軍派は、「蜂起貫徹!戦争勝利!」を合言葉に行動を開始した。「前段階蜂起」の軍事的位置・性格、戦闘目

標と諸計画・諸準備は明らかではなかったが、ともかく軍事行動に着手していった。9月の大阪戦争・東京戦争がそれである。

大阪戦争は、全共闘武装自衛運動が大学立法で権力からつぶされようとしているのに対し、「準備をした武装」への自然発生的再編が各大学に無党派軍団を生み出している中で、これらを秋の蜂起の主体と布陣へと編成・組織していくための闘いとして、市大・京大への機動隊導入を契機に、大阪－京都で市街戦形式を準備するものとして設定された。それは赤軍派にとっては、その中で関西に赤軍をつくり、赤軍－パルチザン－諸軍団の統一戦線をつくるものとしてであった。と同時に、警察・機動隊をそこに引きつけた背後のスキをついて中央軍による交番襲撃－銃奪取闘争として、蜂起準備の独自計画としても設定された。前者の狙いは相応に達成されはしたが、後者は行動が開始されたにもかかわらず貫徹せず、中央軍の規律問題として内向化した。

東京戦争は、ほぼ大阪戦争と同様のものとして、日大の機動隊導入を機に設定された。そこでもやはり、前者の狙いは相応に達成されつつも、後者は貫徹されなかった。

この中央軍による三度の銃奪取闘争の未貫徹＝敗北によって、秋の方針は大きく揺れ動いた。前段階蜂起の道は、開始された敵権力解体の大衆闘争と結合し、その頂点にあっての蜂起に向けた中央軍の独自の軍事闘争と位置付けられ、中央軍は大衆の敵権力解体闘争の頂点に立って、敵の最前線基地本部を殲滅し、そのことによって敵権力の軍事的包囲網を突破しつつ中央権力地帯に追い込めてゆくような実体的・大衆的な蜂起の歩を進め、また10／21より大衆的蜂起の闘争として自覚的に開始させると路線化された。従来の考えは後景に退けられた。このもとで10／9～10神田戦争、10／21新宿－首都制圧－首相官邸占拠へと方針化された。

、10／21の敗北と大菩薩

だがその結果は、10／10の本富士署攻撃等の散発的成果を示しつつも、肝心の10／21－－秋の最大の焦点であり、諸党派・大衆が「中央権力闘争」の志向をもって決起した攻防の環において、一貫した断固たる計画と全組織を動員した系統的準備の欠如もしくは曖昧さの故に、武装（蜂起）闘争を刻印することはできなかった。赤軍派は、自己の分派としての出立の根拠でもあった前段階蜂起を、その最も決定的瞬間において曖昧な態度と準備－訓練不足のままに力を発揮することなく失敗し、やり過ごした。

こうして権力は首都ロックアウト－戒厳体制によって封じ込めに成功し、全体の闘いの流れは半敗北状態で、一歩も二歩も後退を強いられたところで羽田闘争へと流れつつあった。また赤軍派の中でも、失敗した、時期を逸した、大言壮語の空手形、etc.力を尽くしきれないままやり過ごした挫折感が拡がりつつあった。しかし、たことはやらねばならず、また、秋の闘争がまだ敗北したわけではない以上、最後まで踏みとどまり、最後まで可能性を追求して闘い抜くことが人民に対する義務であるという自覚があった。このハザマで苦しみながら赤軍派内には重苦しい気分が支配した。

この重苦しさの中で、前段階蜂起の最後までの貫徹－首相官邸占拠が、国際根拠地建設と一体に提起された。すなわち国際根拠地建設を通じての更なる蜂起の組織化にその発展性・永続性・未来を求め、その突破口として首相官邸占拠を〈革命的敗北主義〉でもって、玉砕覚悟で敢行するというものであった。こうして、赤軍派は全体的に半敗北の情況の下で数歩後退し追い込められたところで、7／6以前の当初の〈一挙的中枢武装占拠〉に立ち帰り〈国際根拠地建設を通じた再進攻〉という一層大きな幻想でおおい込みながら、玉砕戦に向けてその最後の力を全て集中した。それは重苦しい気分の中ではあれ、結成以降初めての、全組織を上げた、全組織を一点に集中した準備だった。だが、にもかかわらず、菩薩における計画性と能動性の欠如のために、敵の弾圧に主動性を確保し得ず、一斉逮捕による敗北をもって終わった。

、前段階蜂起路線の敗北

69年秋の闘いをふり返るとき、赤軍派は政治理論として過渡期世界論－攻撃型階級闘争と、その凝縮としての前段階武装蜂起＝世界革命戦争、そしてそれを担う建党－建軍を大々的に強調したが、軍事方針として前段階武装蜂起を具体化することは、10／21敗北を経るまで遂になかった。というより政治理論としての前段階武装蜂起に逆規定され、振り回されるというか金縛りとなり、リアリズムに立った軍事方針を具体的に計画立て、遂行していく能動的リアリズムを持てなかったのである。

武装蜂起に向けた、計画としての戦術に組み込まれた、党に組織された正規軍による武装闘争ということではなく、それを武装闘争一般として退けた上での、武装蜂起そのものの実現として秋を設定したときから、それは一挙的勝利となるか－－たとえそれが一時的であれ－－、もしくは玉砕戦的突撃となるかのいずれかであった。だからまたそれは、従来からの〈中央権力闘争〉の目標だった〈政府中枢占拠〉を、蜂起軍によって実現することを軍事目標とするものであった。

だが現実に進行する、首都内からの拠点の一掃－機動隊による首都制圧－首都ロックアウト厳戒体制の下で、それは玉砕戦的性格を露とせざるをえず、そのことが方針の動揺をもたらしていた。その意味では前段階蜂起自身、4／28闘争のような政府打倒をめざす大衆的実力闘争－撃破戦とその限界・敗北の延長上に、その一挙的転換の実現として設定されていたと言える。

だが政治的固定観念を離れたリアリズムの見地からは、大衆的実力闘争とは独立した、しかし他の汎ゆる闘争形態との連関を否定せず、あくまで蜂起に向けた計画としての戦術として闘う、それ故、党の正規軍による〈攻撃－迎撃－退却〉の系列を持った殲滅戦計画－－訓練され、計画された部隊によるパルチザン戦闘、それによる首都ロックアウトの揺さぶりと破綻を、まずもっての目標として眼前に提示されていたし、様々な創意と闘いの可能性が開かれていたのである。

しかし赤軍派はあくまで政治理論としての前段階蜂起とその党派性に執着することによって袋小路に入り、その突破を国際的根拠地に求め一層観念的に逆立ちし、主観的世界を拡大していった。菩薩の敗北の一因には、この幻想に支えられた玉砕戦に向けての組織化と中央軍の訓練が二重化され、訓練された正規軍と非正規軍部隊が一緒くたにされ、隊毎の展開能力が解体されてしまっていたこともあった。

69年秋の結果は前段階蜂起路線自身の敗北・破綻を示していたのである。

学習用パンフNo.3
なにからはじめるべきか
発行　「プロレタリア通信」編集委員会
一九八八年五月十五日

学習用パンフNo.1
戦後革命運動から何を学ぶか
発行　「プロレタリア通信」編集委員会
一九八六年三月三十一日

マルクス主義の現段階

旭　凡太郎

反PKO闘争と反スタマルクス主義・ネオマルクス主義

ついに自衛隊ー掃海艇は海外派兵され、それの常態化と第三世界への侵略、民族解放運動・労農運動への介入の常態化を意味するPKO法案が提出されようとしている。

このアジア・第三世界への侵略、帝国主義の市場再分割戦と共同侵略反革命は、日本帝国主義の国家権力を規定し、かつ日本階級闘争の基調をかたちずくってゆくものと考えなくてはならない。

それはまた、総評解体ー連合吸収合併と軌を一にした日本の保守二党または帝国主義戦争協力社民による保革二党体制という支配階級～支配政党再編への道とも連動している。

まさに自衛隊派兵粉砕闘争は、日本階級闘争の左からの革命的再編の命運を握ろうとしている。

今日の戦争と革命の性格

勿論、現在帝国主義が主要に行っている戦争は民族抑圧～民族解放闘争・労農運動への鎮圧を、帝国主義の勢力圏確保～資本輸出の防衛あるいは帝国主義の市場再分割戦の一環として行っているものであり、いわゆる帝国主義（間）戦争といった性格のものではない。

それゆえ革命は「戦争」または「戦争の前段階」の内乱への転化・・として一元的にとらえうる性格をもつものではなく、諸要素の合流としての性格をもつものと考えなくてはならない。

即ち戦争、恐慌や資源枯渇～破壊のパニックまたは恐怖、資本主義・帝国主義の第三世界抑圧、賃労働、農民抑圧、差別への抗議等の合流、さらには労働者国家の階級闘争あるいはそのプロレタリアートの意識的前進やそれの帝国主義との対決・・との合流・・・・として考えることができる。

その意味で一九七〇前後の闘争は、第一次・第二次世界戦争期ー即ち帝国主義戦争と恐慌、内乱とファシズムと革命の時代の一サイクルの終焉後の、次の時代の革命運動への移行の最初の兆れであったということが言えよう。

すなわちアメリカ一国をとっても帝国主義市場再分割戦における敗北過程、ベトナム侵略反対闘争、黒人運動が合流しアメリカ帝国主義史上最初の国民的亀裂をつくりだしていった。

それは国際的には、賃労働制そのものに抗議するフランスの五月革命や、再分割戦ー侵略帝国主義化にたいする闘いとベトナム反戦・労働運動・学生運動・農民運動・諸反差別運動が合流していった日本や、さらに中国文革、チェコ、ポーランド等々国際的に合流していったことにあらわれたのである。

これら総体との関連のうえで帝国主義の戦争、とりわけ第三世界への帝国主義の侵略・共同反革命戦争、ここでの国家権力の再編成と階級闘争が最大の基調をなす、ということと考えることができる。

国際貢献論との闘争の基調

この問題は、今日帝国主義派がしかけているPKO一国際貢献論との闘争という実践的問題とも密接に関連している、といえよう。

そこでは、その海外派兵や侵略反革命戦争とそれにともなう国家再編の切迫の反動性・危険性・自国政府敗北の必要性をバクロするにとどまらずーあるいはそれとともに、第三世界労働者・農民、帝国主義労働者・農民・被差別階層・・の連帯をそれぞれの階級的位置をふまえた資本主義～帝国主義の科学的分析としておこなってゆくということが問われている。

そこでは今日の日本のマルクス主義の分岐ー日共・講座派を近代主義・先進国主義・流通主義・相対主義で突破をはかった新左翼一部潮流（宇野理論。補完するものとしての黒田理論）との分岐を一方とする。他方では中間的諸オルタナティブ（労働、帝国主義～第三世界、国家～分権・自治～社会主義）や相対主義（資本と賃労働、階級規定、帝国主義、国家・上部構造～土台論）による社民・エコロジスト・新左翼の合流を夢見るヨーロッパで支配的な潮流の日本への持ち込みをめざす社憩系一部グループと分岐し、戦闘的マルクス主義の戦線をたたかいとってゆくことが問題となっているといわねばならない。

中核派情勢把握に表れた問題点

たとえば中核派が相変わらず一国社会主義批判で社会主義論争の強行突破をはかろうとしたり、PKOにたいして「核戦争の危機」を訴えたり、イラク問題を民族ブルジョワジと帝国主義の二重性で分析したり、労働運動を旧来の「戦闘的労働運動の防衛云々」「官公労系へのこだわり」で路線化したりするとき（共産主義者八十八）、七十年以降破産していったそのイデオロギーの単なる延長と見る事しかできないだろう。

勿論PKOにたいして対置するべきは侵略戦争～国家再編の危機とともに第三世界・被抑圧民族労働者農民の現実であるだろう。

だが第三世界労働者・農民と資本主義～帝国主義の関係は、資本主義下各種相対的過剰人口や労働者の階層分裂の分析なしにありえず、資本主義・工業への農業・農民の従属の分析、それの国際的連関なしにはありえないだろう。

だからイラク政権を帝国主義～民族ブルジョアジーとの関連で見るー労働者・農民と帝国主義・開発独裁との関連で見ないーことしかできない。

あるいは官公労働運動にせよ「まだ解体されきっていないところにこだわる」ことが問題ではなく、本工主義労働運動批判等として総括された民同労働運動ー新左翼労働運動の総括や、それと不可分な資本主義～帝国主義国における膨大な階層分裂の機構と資本主義搾取機構との関連ぬきにありえないだろう。

あるいは社会主義の諸問題も、資本主義的搾取の一機構を構成する労働の指揮管理と労働の分離ー同じことだが技術的構成ー有機的構成ー産業編成の決定と労働の分離・・といった諸問題ぬきになんらかの分析が可能であろうか。あるいは中国文革・民主化～ポーランド労働運動・ユーゴ自主管理との論争そのものが可能であろうか。

反スタマルクス主義とネオマルクス主義

勿論ここではこれら一部新左翼の理論的現実ばなれを体系的に基礎ずけまたは支柱となっていった「反スターリン主義の経済理論としての宇野理論（補完としての黒田理論）」の誤謬をあとずけることが問題ではない。

ここで問題とするのは、戦後帝国主義の復興・第三世界侵略・プロレタリアートの分裂支配・・の発展のもとで、スターリン派を批判しようとした潮流の少なからぬ部分ー日本の宇野・黒田、ヨーロッパのネオマルクス主義潮流が、つねにマルクス主義（やレーニン主義）の相対化、あるいは先進国主義、社民化によってそれをなそうとしたということなのである。

このことの克服ぬきには決して革命的左翼の前進はありえないだろう。

土台ー上部構造論

ヨーロッパにおけるネオマルクス主義といった場合多岐にわたるため一元的に捕捉することは不可能ではあるが、一応アルチュセール（ここではその土台ー上部構造論のみ）、プーランツァスの国家論、レギュラシオン派の資本主義～現代帝国主義論（一部労働編成論）、従属派の植民地ー帝国主義論を一ケのセットと考えることにしよう。（従属派の場合、他の相対主義・先進国主義に比してやや異質なものと考えられる。）

例えばアルチュセールが土台ー上部構造関係を相対化するとき、戦後帝国主義国家の独自の反革命的構造への直感と、「土台」へのスターリン主義的理解とが一体となっている。

かれが戦後の帝国主義的福祉国家ーその一環たる教育の中にブルジョアジーの意識的階級的立場を見い出だし「労働力の既成秩序の諸規制への服従の再生産への要求」を見い出だしたことに対し、例え

ば日共は教育の国家イデオロギー装置としての機能を否定し、「生産力の側面にかかわっている自然科学的認識や科学教育は直接的には階級的イデオロギー教育ではない」「科学教育をする限りにおいて学校教育は直接的には国家イデオロギー装置としては機能しない」と反論しているのである。（「アルチュセールとプーランツァス」上野俊樹）

勿論それ自体をとればアルチュセールが正しく日本共産党が相対主義者である。

しかしここではいずれも直接的生産過程が、生産力としても生産関係としてもイデオロギーの源泉としても位置ずけられていない。

すなわち

① 国家権力は土台にたいしても働きかけるのであるが階級として、階級の「意識性」の集合体としてである。

② 諸階級にたいしても土台にたいしても働きかける（暴力～政策～イデオロギー）のであるが、その目的もイデオロギーも生産過程と別のものではない。

③ 運動としての被支配階級にたいして鎮圧・譲歩し、あるいはその均衡点からの再組織（政治・経済）にしても生産過程とそのイデオロギーと一体化して行うのである・・といったことが重要である。

その場合、もちろんスターリン派の政治主義的、流通主義的国家把握とは区別されておかねばならない。

すなわち米日反動ー独占の利益への従属としての国家対民主勢力論等である。

そこからは恣意的な「階級的譲歩」と「搾取」と「非階級性（科学・教育・生産力・・従って労働過程も）」等への二元論、三元論へと帰着せざるをえない。

彼らが首尾一環して反帝国主義ー階級関係として一元的にとらえきれないのは、かれらの「階級意識の源泉たる階級関係・生産様式把握」のせまさにあるということを見ておかねばならない。

つまり資本の下での直接的生産過程ー労働力再生産過程、対農業・農民、対被差別階層、対第三世界ー労働者・農民・開発独裁、そして諸階級闘争・民族運動・・総体の運動のなかでの金融資本というふうにスターリン派が把握しないことが問題なのだ。その政治主義的全般的危機ー体制間矛盾ー米日反動論や流通主義的「独占価格論」ー搾取のからくり論等である。

生産力ー生産関係

それはスターリン派が生産力を中立的とみるような生産力把握ーつまり生産力を抽象的にとらえることとも関係している。すなわち生産力とはその労働過程なり労働様式（さらに産業編成）としてしか有り得ないわけだが、それはまた生産関係の一構成要素としてしか有り得ない、といった基本的理解の欠落ということなのである。

ちなみにマルクスが経済学批判序説で「生産」「分配・交換・消費にたいする生産の一般的関係」として論じているように、生産諸関係において生産過程は規定的役割を果たしている。ーただし詳しくは剰余価値の生産・実現・資本への転化・・の相互関係（ならびに再生産表式・総過程・恐慌・・）として論じられるべきである。

だからいわゆる生産力と生産関係の矛盾といった場合にも、それを抽象的にとらえ勝手に自己運動させておいて、その矛盾が起動力か否かといったところで議論そのものが成立しない。

つまり資本主義の下での生産力の発展とは、有機的構成または技術的構成の発展・労働様式の発展が資本の専制に規定されて、プロレタリアートの隷属を強化するなり、機械への従属・労働の位階位制の強化・階層分裂・精神労働ー科学と生産的労働の分離の拡大、各種相対的過剰人口の再生産の拡大をもたらす。あるいは被差別階層を再生産する。

あるいは有機的構成ー労働編成における資本の専制によって蓄積ー労働者の消費をも規定し敵対的分配と過剰蓄積・過剰生産・恐慌をくりかえす。

あるいはその工業の発展が農業・農民を駆逐する。

あるいはその集積ー資本輸出ー国際化・植民地化が第三世界の開発ー近代化、労働者農民の零落、帝国主義国労農問題の転嫁、民族抑圧と資本主義・前資本主義の最悪の部分の相乗化をつくりだす。

あるいは帝国主義の市場再分割戦に規定されて戦争を不可避とする。・・・

といったことが、たとえば生産力ー生産関係の矛盾[illegible]、土台といったことなのだ。

そして戦後革命～民族解放運動に対抗したブルジョワジーの新植民地主義、ＩＭＦー安保・ＮＡＴＯ、帝国主義福祉国家が鎮圧とともに分裂策として登場したとき、それは生産過程とむすびついたものであった。

即ち直接的生産過程（フォードシステムと通称されている）、ＮＩＣＳ化と連動して、この政治的反革命を直接的生産過程の要求するイデオロギー、規律と一体化しているというのが現実なのだ。

つまり土台にたいする上部構造の相対性という論議自体が形式論理でしかないということなのだ。

もちろんプロレタリアート、ブルジョワジーの運動の発展、後退・・は独自の歴史をもっている。だがそれぞれのプロレタリアート、ブルジョワジーの行動はそれぞれの歴史的継起に対応するにしても、そのイデオロギー、諸階級の行動はその土台を源泉にしているということが重要であり、それ以上のことは「唯物史観」という抽象のレベルでいう必要はないわけである。

だからアルチュセールの土台ー上部構造の相対化の理論は、スターリン派の問題点を明確にし解体を促進するとともに、戦後帝国主義の発展と階級闘争の後退化局面にあって、市民主義の力を増大することと一体となって進行した。

国家ー二重権力

このことはプーランツァスの国家論においてもおなじ問題をみることができる。

かれの場合も国家論として見た場合、「国家内階級闘争」等論議外的要素が多いが、プロレタリアートの権力論ないし上部構造論として見た場合にはスターリン派議会主義の空白の部分を突いたという面を見逃すことはできない。

つまり彼のモチーフである「国家＝階級関係の凝縮」は、ブルジョワジ階級ープロレタリア階級の対決の攻防の水準として見た場合には理論的分析たりうる。

つまり新左翼の場合、この問題は二重権力論として（あるいは過渡期世界論なり恒常的武装闘争論として）討議されてきた。

プーランツァスの場合には社会民主主義型運動を背景として論議されていると推察される。

スターリン派の場合には「国家＝階級支配の道具論」という一見正しいネオマルクス主義批判を、「議会における勢力如何」という本質的日和見主義を隠ぺいし二元化するために利用し、プロレタリアートを統制するものとして展開しているわけである。

階級闘争とプロ独の検証

そこで問題となっているのは、国家の暴力機構との直接的対決としてみずからの「階級関係論」ー階級意識論を鍛えあげていった新左翼の勃興期から、それを清算することなく引き継ぎつつ、しかし味方の統一をもって国家権力との対決・「凝縮点」をつくり出して行くという課題なのだ。（もちろんそれは実践的には当初からおこなわれてきた。しかし理論的には宇野ー革マルに代表される未熟な道をたどってきた。）

つまりプロレタリアートの階級（内）的統一、プロレタリアートの農民対策、被差別階層への対策、第三世界プロレタリアート・農民との団結の水準をもってして帝国主義権力・侵略権力と対峙して行くということなのだ。

（オルタナティブ論とは、具体的階級対立・闘争ぬきに平板に、直接に実現したいという願望である）

これらが今日の、帝国主義の市場再分割戦ー資本輸出ー第三世界支配ー軍事的膨張ー保守二党または保革二党という日本帝国主義の基調のもとでの主要課題である。あるいはそれが戦後帝国主義の基調をなす帝国主義の侵略反革命同盟、新植民地主義、帝国主義的福祉国家と労働者の分裂支配・・の再編として進行しているなかでの主要課題である。

ここにおいて侵略反革命粉砕を、第三世界労農階級の反開発独裁・反多国籍企業・反帝国主義運動との連帯として闘うということはいうまでもない。同時にプロレタリアートの分裂支配をつくり出している諸工場制度～相対的過剰人口との闘い、農業労働の工業労働への従属と闘うことをとうした労働者農民の団結、被差別階層との連帯等資本主義的再生産過程との闘争の結合（いうまでもなく差別と資本主義的生産過程とは同一ではない。差別は資本主義が再生産

しひきつぐがつくりだすわけではない。部落解放運動が主張したように、主要な生産関係から除外したり、底辺・重石化したり、または生産過程から駆逐することを結果するような歴史的関係として必ず存在する。）をとうしてプロレタリアート独裁の内実を検証してゆくことが問われる。

さらにそれらを、帝国主義国家権力ーその軍事・外交・治安はもちろん、帝国主義的福祉国家ー教育・差別的労働力再生産（イデオロギー・技術はもちろん工場制度の諸秩序へ従属するものとしての）との闘いと結合してゆくこと等として存在している。

これら街頭、工場、農村、地域や差別の現場における実力闘争は現下の後退局面にあっても新しく登場し、あきらかに次の時代を準備している側面をわれわれは決して見逃してはならない。

これに対してプーランツァスは戦後の帝国主義的福祉国家への批判と内部からの闘争という点に自らの国家論を立脚させている。

それは確かに旧来の国家論（階級支配の道具、法の支配、暴力、幻想の共同体、市民社会の総括、公的利害ー私的利害の分裂、経済ー政治または市民社会・国家の分裂）が、日共のごとき反動的修正主義との並列を許すことや、スターリン派国家論の破産を示唆している点を見逃してはならない。

とはいえその（外から攻撃しつつの）内部からの改革論は、「国家と資本ー賃労働」「国家と革命」における相対化論の流行の起点であることを見逃してはならない。

それは資本主義ー帝国主義論におけるレギュラシオン理論なり、オルタナティブ論の背後を強化している。

つまりオルタナティブ論とは、国家と革命または国家と社会主義、資本と賃労働、帝国主義ー多国籍企業ー開発独裁と第三世界労農階級のそれぞれを厳密に位置ずけず、それぞれを相対化し、恣意的または空想的に結合する考えである。

それらは帝国主義国家とプロ独国家（プロ独下の自己統治・自己管理）とを共通項化して分権を対置したり、資本と賃労働から恣意的に生産第一主義とか意味ある労働とか労働編成とかを抽出したり、第三世界労農ー開発独裁ー帝国主義国家ー帝国主下義労農の現実的分析を経ずに多国籍企業の計画・統制や資源略奪ー破壊をとりだす。

つまり階級闘争は、帝国主義国家下といえども、対権力・資本との均衡関係をつくり出すのみにとどまらない。そこでの味方（階級内～間。さらに国際的）の統一においてプロ独下階級的団結の質が問われる。

しかし他方現実の運動は生産様式ー国家に規定された運動でしかないのであって、その落差は革命理論において補完されてゆかなくてはならない。

これらをオルタナテイブ論は観念でとびこえようとしている。

（共労党のレギュラシオン理論、ポストフォーディズム、労働編成支持論はその恣意性、強引さのあらわれである）。

レギュラシオン、従属派と宇野・

田

レギュラシオン派はこのようなヨーロッパとりわけフランスにおける「相対化」の流れの一環として、資本主義ー帝国主義ー賃労働分析において登場した。

勿論「マルクスの貢献は生産過程の深奥において結ばれる社会的諸関係の分析・・（リピエッタ）」という直観、並びに二九年恐慌と戦後的発展をその有機的構成ーフォードシステムならびに戦後反革命（帝国主義福祉国家）の連動関係においてとらえようとしていることには先進的意義と一定のリアリティがある（宇野型賃金上昇恐慌論～大内国独資論や、日共型過小消費論との対比）。

とはいえかれらが現実の資本主義を商品関係、賃労働、競争、国際体制、国家・・の諸制度と「調整」との関連でとらえるとするとき

Ⅰ　資本の賃労働にたいするならびに有機的構成をめぐる専制と、それと対になった剰余価値の生産・実現・資本への転化における資本の自立性が主体としてとらえられていない。そのかわりに「調整」としてそれぞれが相対化される。

Ⅱ　そのため資本ー賃労働関係も相対化され、フォードシステムの危機＝労働者の参加不足による収益性危機・・云々が捏造される。

（従ってポストフォーディズムによる収益性・生産性上昇が計画される。）

Ⅲ　現実の農民（工業への農業の従属、それの第三世界への転化＝モノカルチュア、前期資本主義～封建制）やプロ・リアート（各種工場制度～相対的過剰人口）が理解の外にあり、従って植民地問題を把握できず、またそれと不可分な関係にある帝国主義ーその市場再分割戦、資本輸出と勢力圏、侵略反革命・・は分析の外にある・・

といったことを結果する。

宇野理論

ここではレギュラシオン理論の検討を直接の目的としない。むしろ日本の一部新左翼マルクス主義宇野（黒田）との関連を問題とする。

日本の新左翼が宇野理論を主流とすることによって失ったものと、このネオマルクス主義が革命的左翼から奪い去ろうとするものとの関連をだ。

宇野理論を簡略化してみる。すなわち①商品関係にもとずく資本主義の自立性　②それにもとずく資本主義分析の改組と唯物史観あるいは土台上部構造論　③有機的構成高度化ー労働力吸収度からする段階論ならびに封建制地主論批判　④資本主義の自立性と国家、世界、歴史、階級闘争等との分離、段階論

等を挙げることができる。

それはまた資本主義の自立性から資本（ならびにその下での賃労働ー絶対的相対的剰余価値生産ー相対的過剰人口）を排除すること、すなわち資本の剰余価値生産・実現・資本への転化の自立的運動を排除することである。（それは搾取過程一般にとどまらず有機的構成～再生産表式をも決定するのである。）

そのため土台ー上部構造論としても生産過程～階級関係なき一元的構造論となる、等言うことができる。

それは実質的には資本ー賃労働を科学の分野からはずして相対化することのはしりであったと今日からはいうことができる。

それはまた農業問題や前期的資本主義・封建遺制下農民を資本主義ー帝国主義との関連から相対化してゆくはしりでもあった。

さらに労働者階級の階層分化ー相対的過剰人口を相対化し、従って帝国主義と植民地問題の解明や差別問題、民族問題を（スターリン派の政治主義・ブルジョワ民主主義からの解放の名の下に）資本主義分析から相対化してゆくはしりでもあった。

反スターリン主義と市民主義

つまりここで重要なことは、日本の一部新左翼にせよ、ヨーロッパのネオマルクス主義にせよ、スターリン派との闘争において理論を構築するとき、いずれも近代主義、先進国主義、相対化（資本、賃労働、国家、帝国主義）の道を歩んできたということなのだ。

（従属派の場合は勿論異質である。しかしオルタナティブ派に利用されるように農民、前期資本主義、労働者の分析は主力となっていない。）

日本の場合には、それは独特のかたちでー黒田疎外論や実践の個人主義や、より本質的には運動の左翼的展開や運動論・戦術論によっておぎなわれてきたのである。

あるいは次のようにいえる。

そのようなスターリン派、宇野派にもかかわらず運動は発展してきた（あるいは壁にぶつかっている。）。

労働運動の官公労から民間・下層へ、第三世界との連帯、被差別運動、農民との連帯、反戦闘争、学生運動、市民運動、地域運動・・。理論もそれに必要な限りでの理論を生みあるいは壁にぶつかっているわけだ。

われわれはその歴史からとびはなれることはできないだろう。

すなわち反帝国主義における反侵略・自国政府敗北の位置、反差別と糾弾権・底辺または生産関係からの除外論・行政闘争、農民問題と反前期資本主義・工業への従属、反合理化・労働争議・職場闘争と結びついた労働編成分析、資本主義の自立性と資本ー賃労働ー恐慌、対権力政治闘争ー二重権力等々の論争から分離することはできないだろう。

すなわち六〇年前後のスターリン派との闘争、六〇～七〇年の宇野・黒田との闘争、七〇年以降の諸運動の展開と既イデオロギーの解体のもとでの、反スタ＝相対化・市民主義・社民化という形をとっているヨーロッパのネオマルクス主義との闘争としてイデオロギー闘争は発展している。

そしていずれにせよわれわれはそれらを一連の、新左翼の世界的同時的発展の一環した流れとして統一的に考えて行かねばならない。

（旭）